

## 神は生きておられる

丸山 勉

### 【聖書】 ヨブ記19章21節～29節

憐れんでくれ、わたしを憐れんでくれ  
神の手がわたしに触れたのだ。あなたたちはわたしの友ではないか。  
なぜ、あなたたちまで神と一緒にになって  
わたしを追い詰めるのか。肉を打つだけでは足りないのか。  
どうか わたしの言葉が書き留められるように  
碑文として刻まれるように。  
たがねで岩に刻まれ、鉛で黒々と記され いつまでも残るように。  
わたしは知っている  
わたしを贖う方は生きておられ  
ついには塵の上に立たれるであろう。  
この皮膚が損なわれようとも  
この身をもって わたしは神を仰ぎ見るであろう。  
このわたしが仰ぎ見る  
ほかならぬこの目で見る。腹の底から焦がれ、はらわたは絶え入る。  
「我々が彼を追い詰めたりするだろうか」とあなたたちは言う。  
この有様の根源がわたし自身にあるとあなたたちは言う。  
あなたたちこそ、剣を危惧せよ。剣による罰は厳しい。裁きのあることを知るがよい。

### 【序】 私たちの信仰と「ヨブ記」

キリスト教の信仰というものは、よく「み言葉信仰」と言われるように、聖書の言葉と切り離すことが出来ないものです。それはとても大切なことだと思います。しかし、それが一つの誘惑になってしまうことがあるように思うのです。それは聖書を学問的に「勉強する」ということが信仰そのものとすり替わってしまう。言ってみれば**観念的な信仰**になってしまうという恐れをいつも孕んでいるということです。言い換えれば、**頭でっかちな信仰**に陥ってしまう、ということです。（これは、信仰を言葉で表現することを生業とする牧師や伝道者が特に覚えていなければならないことだと思います。）

今月は旧約聖書の『ヨブ記』からご一緒に聞いていますけれども、これはひとりの生身の人間であるヨブの、**神様との格闘の書**だと言うことも出来ると思います。**観念的や抽象的ではない、現実的なヨブの深い内的な戦い**です。自分に起こった**具体的な苦しみの中で声を上げている**のです。この『ヨブ記』は、あの第二次世界大戦でナチスドイツに民族的な迫害を受け、アウシュビッツの強制収容所に送られたユダヤ人の人々にとっては、**深い慰めの書**でもあったということです。「なぜ、他ならぬこの私たちが、この私が、このような目に遭わねばならないのですか！」と、説明がつかないこの世の苦難、不条

理に直面させられた者にとって、聖書は無力ではないのです。聖書は綺麗ごとを書いているのではないのです。『ヨブ記』の中のヨブの訴え、叫びは、ちょうど『詩編』の中の嘆き・叫びと同じように、苦難の中を歩む者たちは、そのみ言葉に自分を重ね、それをそのまま神様への訴え、また祈りとしてきました。現代の私たちにとっても同じではないでしょうか。

## [1] ヨブの苦難

『ヨブ記』が書かれた時代は諸説あるようですが、イスラエルの国が、あのバビロン捕囚を経験した後の、紀元前5世紀であるというのが有力です。「なぜ神様を信じてきたイスラエルの民が、国の滅亡と言う憂き目に遭わねばならなかったのか」という深い問いがその背景にあると多くの聖書学者たちは言っています。善人が報いられ、悪人が滅びる話を見たり聞いたりすると私たちはホッとします。そうでなければやり切れないからです。遠山の金さんばかり、ディズニーばかりです。けれども人生には、私たちの理解不能な事・不条理な事が降りかかってくることがあります。

先週の礼拝で「人生の災難」との加藤先生の宣教題で、ヨブ記の1章～2章を見ました。少しヨブの災難を思い起こして下さい。ヨブは神様に「わが僕ヨブ」と紹介されるほど、神様の前に敬虔に生きてきました。神様も彼を祝福し、妻と7人の息子、3人の娘を与えられ、沢山の家畜と牧童、また財産を恵まれ、東の国で一番豊かな者だったとあります。ところが、サタンが、神様の許しのもとで、ヨブの持ち物を全て取り去ってしまいました。家畜が全て失われ、牧童たちがみな殺され、更に愛する子どもたちが天災に遭ってみな死んでしまいました。けれどもヨブは衣を裂き、地にひれ伏しながら言うのです。「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ」(1:21)。

更に苦難が襲いかかってきます。サタンは神様に、ヨブの体に手をかけてもよいかと申し出ます。神様は「命だけは奪うな」と制限付きでそれを許可します。そしてヨブの体は「頭のとっぺんから足の裏までひどい皮膚病」にかかってしまいました。ヨブは灰の中に座し、素焼きのかけらで体をかきむしるほどだったと言います。彼は外見も変わってしまいました。ヨブには親しい3人の友人がいて、彼らは遠方からヨブを訪ねたのですが、遠くから彼を見ると、それと見分けられないほどの姿になっていたの、嘆きの声をあげたと記しています。そして彼らは七日七晩、ただヨブと共に地面に座り、話しかけることも出来ずにいたということが記されています。文字通り「言葉を失って」しまったのです。

この3人の友人の名前はテマン人エリファズ、シュア人ビルダド、ナアマ人ツォファルです(2:11)。『ヨブ記』の3章以下の構成は、3章でのヨブの嘆きから始まり、このヨブの3人の友人との対話が3回巡っています。ただ3回目はツォファルは出てきません。またその後、もう一人エリフという若い人物が出てきて、彼の言葉が32章から37章まで記されています。それは来週の箇所に含まれています。そして、遂に神様がヨブに現れるのは38章以下です。それまで隠れていた神様の言葉とそれに応答するヨブが描かれ、そして42章で結びとなっています。

## [2] ヨブの格闘

2章までのヨブは新約聖書のヤコブの手紙にもあるように、大変忍耐強い人物として描かれています(ヤコブ5:11)。また自分の妻の言葉に対しても「私たちは神から幸福をいただいたのだから、不幸も頂

こうではないか」と神様への誠実な態度を貫いています。けれども、それで終わりではありませんでした。そのことはもしかすると慰めであるかもしれませんが。ヨブほどの人物もまたひとりの人間であったということですから。

3章以下でヨブは自分の人生の絶望を語るようになります。「私の生まれた日は消えうせよ」(3:1)と言い、その後のヨブの言葉はひたすら忍耐すると言うより、むしろ、なぜ神様は正しく歩んできた私にこのような理由の分からない苦しみを与えるのですか！と、**神様を糾弾する言葉が随所に見られるようになります**。彼の苦悩はとてつもなく深かったのです。それまでヨブに声をかけられなかった3人の友人たちは、その後かわるがわる、**良かれと思ってヨブに声をかけますが、それはヨブにとって解決にはなりません**でした。彼らの言葉は基本的には**応報思想**でした。“何か原因があるからあなたは苦難を背負っているのだ。神を侮ってはならない”と言うような、まるで自分が神様の代理であるかのような言葉をヨブに投げかけます。ヨブはそのような友人の言葉をもう聞く気にはなれません。ヨブは、**神様ご自身に立ち向かう以外にありません**でした。ヨブは神様と「格闘」をするのです。

13章1節以下には、ツォファルの言葉を受けてこのようなヨブの言葉があります。

「そんなことはみな、わたしもこの目で見この耳で聞いて、よく分かっている。あなたたちの知っていることぐらいいわたしも知っている。あなたたちに劣ってはいない。わたしが話しかけたいのは全能者なのだ。わたしは神に向かって申し立てたい」。

16節以下もヨブの強い言葉が出てきます。

「このわたしをこそ神は救ってくださるべきではないか。神を無視する者なら御前に出るはずはないではないか。よく聞いてくれ、わたしの言葉を。わたしの言い分に耳を傾けてくれ。見よ、わたしは訴えを述べる。わたしは知っている、わたしが正しいのだ。わたしのために争ってくれる者があればもはや、わたしは黙って死んでもよい。ただ、やめていただきたいことが二つあります。御前から逃げ隠れはいたしませんから。わたしの上から御手を遠ざけてください。御腕をもって脅かすのをやめてください。そして、呼んでください、お答えします。わたしに語らせてください、返事をしてください。罪と悪がどれほどわたしにあるのでしょうか。わたしの罪咎を示してください。なぜ、あなたは御顔を隠し、わたしを敵と見なされるのですか」。

### [3] 訴えの只中で

——ヨブの思いはもうどん底でしょう。しかしその「深き淵」から神様に訴える、その祈りの中で、ヨブの心に、神様に対しての新たな思いが与えられます。まず**16章**から見てみます。このようにあります。18節以下です。

「大地よ、わたしの血を覆うな。わたしの叫びを閉じ込めるな。このような時にも、見よ、天にはわたしのために証人があり、高い天には、わたしを弁護してくださる方がある。わたしのために執り成す方、わたしの友、神を仰いでわたしの目は涙を流す」。

神様、なぜ私を敵とみなされるのですか？と問うのも**ヨブその人**であります。それと同時に、天にはわたしのために証人があり、わたしを弁護してくださる方がある、わたしのために執り成す方をわたしは仰ぐ、と語っているのも間違いなく**ヨブ本人**です。神様にけんかを売っているのか、或いは神様によりす

がろうとしているのか、どちらなのかと問いたくなりますが、でも、どうでしょう？「祈り」とは、「真剣な祈り」とは、そのように丸ごとの自分自身を神様にぶつけ、また神様の助けを求めていくものなのではないでしょうか？

そして、執り成して下さる方・神様に向かって涙を流す、と言ったヨブでしたが、今日の箇所**の19章**に入ると、『ヨブ記』の中でも一つのクライマックスでもあると言われるみ言葉が出てきます。23節からお読みします。

「どうか わたしの言葉が書き留められるように。碑文として刻まれるように。 たがねで岩に刻まれ、鉛で黒々と記され いつまでも残るように。

わたしは知っている。わたしを贖う方は生きておられ、ついには塵の上に立たれるであろう。この皮膚が損なわれようとも、この身をもって わたしは神を仰ぎ見るであろう。このわたしが仰ぎ見る。ほかならぬこの目で見える」。

ヨブは、自分の訴えが永遠に記憶されるように鉛で黒々と書きとめられるよう求め、そして、**自分を贖ってくれる存在が活着していることをわたしは知っているのだ**、と大胆に告白します。「贖い」とは、ここでは、ヨブの不当に奪われた権利が回復する、といったような意味合いのようですが、それをしてくれる存在がどうしても必要なのです。つまり、16章の所でも出てきた「証人」とか、「弁護してくださるかた」とか「執り成してくださるかた」とありましたように、自分ではどうしても解決できないことを解決へと導いてくれる「仲介的な存在」が自分のためにいるのだ！しかもその方が「塵の上」に（口語訳「地の上に」）、つまり抽象的な方ではなく、現実の存在としていて下さるのだ！と告白しているのです。ヨブは祈りの只中でこの告白に導かれました。そして、私たちはこの告白の延長線上に、神様が正にこの地上に救い主として送ってくださった、**主イエス・キリストの存在**を見ることが許されている、と言ってよいのではないのでしょうか。あのヘンデルが作曲した、主イエス・キリストの預言・生涯・復活を歌ったオラトリオ『メサイヤ』の中の、ひときわ美しく重要なアリアとして、この**ヨブ記19:25**の言葉が用いられています。

#### [4] 「最大の罪とは、祈らないこと」

ヨブの祈りの格闘はまだ続くのですが、私たちはここでちょっと立ち止まって考えてみたいと思います。私は初めのほうで、私たちの信仰はともすると頭でっかちになりやすいもので、そのためにこの『ヨブ記』や『詩編』の祈りを味わうことが、私たちの信仰生活の大きな励みになるのではないかと申しました。最近読んだ本の中でもこのような文章に出会うことが出来ました。

W・ブルグゲマンという人が書かれた『詩編を祈る』という本の中の文章です。

「（「詩編」の）嘆きの詩の殆どは“俺たちは猛烈に頭にきている。もうこれ以上我慢することは出来ない”と言っているのです。丁寧で礼儀正しく、控えめなことが信仰的だとするなら、彼らは信仰的ではありません。彼らが信仰的であるのは、この混乱状態を、聖なる方に向かって真正面からはっきりと言葉で語ろうとしているという、その意味においてだけです。嘆きの詩は、身近なところにある困難な事柄に心を奪われながらも、必ず神をその名で呼び、神からの答えを期待するのです」。

私はこの言葉を読んで、あの『祈りの精神』というフォーサイスの名著の一節を思い起こしました。「最大の罪とは、祈らないことである」。これは逆説なのです。「祈れ」という神様の招きを拒絶するほど強くな



ってはいけないのです。礼拝の招きの言葉として読んで頂いたあの「**疲れた者、重荷を負う者は、誰でもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう**」という主イエス様の言葉も、私たちへの、神様・イエス様との「祈りの交わり」への招きです。「祈り」とは他ならぬ「わたしに祈りなさい」という生ける神様の招きがあって成り立つものです。**神様が生きておられるから私たちは祈れるのです。空しくならないのです。**「礼儀正しく、控えめに、上品に」などと心がけなくてよいのですね。それでは自分に祈っていることと同じです。

### 【結】 主の十字架と復活につながる

最後に、皆様にも祈りに覚えて頂きたいことがありますのでご報告させて下さい。私は一年半前に東京バプテスト新学校を卒業したのですが、その時の学生主任だった**千葉教会の矢野満先生**が今、がんの闘病をされています。先生は私の卒業後の進路のことでは大変祈って下さり、この川越教会と私を繋いでくださったお一人でもいらっしゃいます。もう何度も抗がん剤治療もされ、入退院を繰り返されています。本当に危なかったことがこの9月にあったようです。10月1日に退院をすることが出来たというのですが、このような報告を読みました。

「私は病院のベッドの上でこれまでにない激痛に襲われました。2回目の痛みは更に激しいよいよ我慢ができず吐血したのです。血圧が上が50台までに下がり下は測定不可能、体温も急低下する中、「もうこれでおしまいか」という思いが頭をよぎりました。個室に移され、懸命な処置が始まりました。鼻から管を入れ、出血した血や腸に流れず溜まっていた液体を吸い出し、同時に輸血が始まりました。徐々に血圧、体温も上がって。私は命を繋ぐことができました。私はどんな状況にあっても「神への祈り」はできると自負していました。しかしそれは自分の信仰の傲慢でした。「神さま助けてください。この痛みから解放してください」の一言が出てこないのです。口をついて出てくるのは「う～、痛い、苦しい、あ～」という「呻き」のみでした。人間は弱いのです。私の口から出た「呻き」は私の内に生きて働かされている“**聖霊**”による執り成しの「呻き」であったことに気づいたのです。神さまの憐れみに感謝しました。ハレルヤ！」

私たちが祈れない状況になる時でも、**聖霊ご自身が、その呻きを持って私たちのために、私たちに替わって執り成して下さる、**ということを先生は体験されたと言うのです。本当に素晴らしいお証だと思いました。正に「**私は知る。わたしを贖うものは生きておられる**」ということです。私たちも、思わぬ試練、苦しみに直面させられることがきっとあるでしょう。もうありましたよと仰る方もおありでしょう。苦しみは誰にも替わってもらえませんかから本当に孤独です。しかし**その時こそ、実は主は近いのではない**でしょうか。その孤独と苦しみを既に主は先んじて受け止めていて下さっているということを信じてよいのではないのでしょうか！

それだけではありません。ある牧師先生はこう仰いました。「**私たちの直面する苦難を通して、自分がキリストの苦しみに与っていることに気づくのです**」と。本当にそうなのだと思います。キリストに捕らえられた私たちの中には、**主ご自身が生きておられるのです！**そして、**私たちの痛みや試練は、あの神の子のご受難と死のほんの一部を味わわせて頂いている恵みだ、**と告白出来るのではないのでしょうか。そして**十字架は必ず復活に繋がっているのです！**私たちはこの終わりに与えられる希望から、今を生きることが出来るのです。この真の望みを与える主の手に引かれて、それぞれに与えられている地上の馳せ場を生きて参りたいと思います。

<祈り>

「わたしを呼ぶがよい。苦難の日、わたしはあなたを救おう。そのことによってお前はわたしの栄光を輝かすであろう」(詩編50:15)。主よ、あなたは私たち一人ひとりがあなたとの交わりの中に入ることを喜んで下さいます。いえ、既に十字架と復活の主ご自身が私たちの中に内住して下さっています。いつもその生ける主を求め、生ける主の声に聞き続けることができますように。あなたを喜ぶ信仰をお与え下さい。救い主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。